ヒューリスティック間における境界の特定

長瀬岳志

人の認知機能には意思決定という働きがある。意思決定が働く脳の情報処理のプロセスは、アルゴリズムとヒューリスティックに分けられる。ヒューリスティックは判断者の経験や知識に基づいて直感的で感覚的な判断を行うことである。ヒューリスティックには脳への情報処理の負担が少なく、判断の時間が短いというメリットがある。一方、判断の結果、認知バイアスが現れるというデメリットがある。意思決定場面で現れるヒューリスティックや認知バイアスは、これまでの行動経済学・社会心理学の研究において多種多様なヒューリスティックが発見・例示されてきた。しかし、亀田（2020）は定義付けの方法が日常の「あるある感」をもとにしたものであると指摘している（亀田 2020 : 31）。そのため、各ヒューリスティックや認知バイアスはそれぞれの研究者によって個々別々に定義されてきており、類似した定義がいくつも存在している。このような現状は意思決定研究の発展を阻害する要因となっている。これらを踏まえ、本研究の目的は統計的な検証を行い、ヒューリスティックや認知バイアスにおける明確な境界の特定を行う。そして、境界ごとに共通する認知的特性についての検討を行い、ヒューリスティックや認知バイアスの発生要因を探ることである。

本調査は社会学部社会学科に所属する小野田ゼミの平井敬大氏と共同で行った。調査は現在まで例示されている、後知恵バイアス、確証バイアス、連言錯誤、プライミング効果、感情ヒューリスティック、外集団均質性バイアス、敵意帰属バイアス、中心特性・周辺特性、少数の法則、同調性バイアス、現状維持バイアス、再認ヒューリスティック、対応バイアス、アンカリング効果、自己奉仕バイアス、利用可能性ヒューリスティック、代表性ヒューリスティックを用いた。調査対象者に対し日常で起こりえる意思決定場面を想定した質問を提示し、ヒューリスティックや認知バイアスの現れを測定した。調査データを因子分析にかけた結果、対象にした 17 個のヒューリスティックや認知バイアスは、判断者の感情レベルに起因するもの、判断者と意思決定対象との社会的関係に起因するものなど、発生要因で 7 種類の境界に分けられる事が明らかとなった。これがヒューリスティックの境界であり、同じグループに属するヒューリスティックは同じ心理的・認知的な要因によって発生している可能性がある。

本研究でヒューリスティックや認知バイアスの範囲を、統計的な検証を元に明確にすることは、一般的に人間が意思決定の際に持つ心的能力を明らかにすることにつながる。今回明らかになった発生要因を更に検証することで、社会心理学として人に共通する内的な思考システムを探求することが可能となる。その結果、人々の行動や意思決定に対する予測が向上し、社会的な課題に対処するための効果的なアプローチが生まれることが期待される。